

活版草双紙の誕生

—大阪版より藍泉の独自性に及ぶ—

佐々木 亨

要旨 外装から口絵までは木版による合巻と同一でありながら、本文は活版、挿絵は数丁毎に上（下）段に置かれるものを、昭和初頭に三田村鳶魚氏等は東京式合巻と命名し、興津要氏もこの名称を用いて今日に至る。その嚆矢は明治十二年刊の高島藍泉作『巷説兎手柏』とされていた。しかしその前年藍泉は大阪に滞在し、その大阪では既に活字版を用いた小説類が作られ始めていた。摺付表紙を持つ本文は銅板のもの、挿絵が本文の上（下）段に配されるもの、見返しにおいて筆跡を伝えるべく木版にしたもの、連載の挿絵を転用しているもの、連載の母胎から単行本化されるもの等々、『兎手柏』出現前に実験的な試みがなされている。しかもこれらの出版には、藍泉刎頸の友宇田川文海が関わっている如くである。藍泉はこれら大阪版の存在が確認される以上、東京で商品価値を持ちそうな造本を工夫した可能性が高いのである。これらの先行する大阪版の存在が確認される以上、東京式合巻なる名称は不適切といわなければならない。また挿絵が毎丁配されていないものを合巻と呼ぶのも賛成できない。この際、活版草双紙なる名称を提案したい。草双紙の名称を用いる所以は、合巻との造本上における共通要素の残存と、建前として想定された読者層の一致である。実際、藍泉自身当時の著作を草双紙と呼んでいるのである。

中本にして摺付表紙を備え、見返し、口絵、序文までが木版、本文は活版で挿絵は上段あるいは下段に数丁毎に配され、奥目録と後表紙は木版（奥目録が活版の場合もあり）。このような体裁の草紙を三田村鳶魚、石川巖両氏は東京式合巻と命名し、この名称は興津要氏、そして前田愛氏も継承して用いている。既に拙稿でも指摘したが、三田村氏は「我等は自分だけのことだが、外形から錦絵表紙袋入りの合巻を、木版と活版とで江戸式東京式と云つて居る」（明治年代合巻の外観）、「早稲田文学」大正14年3月号）とし、印刷技術の違いに基づく仲間内だけの名称であったことが判る。石川氏は「初期戯作年表」（昭和2年、従吾所好社）明治十二年の『巷説兎手柏』の項において「当時はまだ木版印刷全盛時代に、鉛活字版を用ゐたのは所謂東京式合巻草双紙の先駆とも見るべきものであるが、これより約半年前、本年二月発行魯文の「高橋お伝夜又譚」初編三冊が初見であらうか」と指摘し、この名称が未だ認知に至らぬ様を示すと共に先行する作の存在にも言及している。実際、同時期野崎左文は「私の見た明治文壇」（昭和2年、春陽堂）において、新聞小説を回想しつつ活版によつてものとされた草双紙を「明治式合巻と称へる人もいる」とし、また高島藍泉を回想する箇所では「所謂明治式草双紙」とも呼んでいる。明治期の草双紙でも、『鳥追阿松海上新話』の如く木版のものと、前掲『巷説兎手柏』のように活版のものが混在する時期があるので、これらをも区別するべく前者を明治式合巻、後者を東京式合巻と呼び分けた。それらに先立つ江戸式合巻を加え、ここに三種の合巻名称が提示された。命名者は未詳だが、石川氏による前掲書や「写実主義以前の小説」（日本文学講座）第9〜12巻、昭和2年、新潮社）あたりが早いものであるか。江戸時代の合巻を明治期のそれと区別する必要が生じた結果、後者がある

者は東京式、またある者は明治式などと各自各様に命名していたのが、昭和の初頭であった。

興津氏は『転換期の文学』（昭和35年、早稲田大学出版部）において、「仮名垣派のはじめた漢字ふりがなつきの明治式合巻もたしかに江戸の合巻とちがつて、…柳亭派では十二年というはやい時期に活字の東京式合巻―普及は十五年ごろ―を刊行し」と記述し、ジャンル名称として躊躇うことなく明治式と東京式を共に提示している。前田氏もまた『近代読者の成立』（昭和48年、有精堂）において「江戸式合巻から東京式合巻へ」という一章を設定している。しかし前田氏は同章中で「周知の通り、藍泉は活版式合巻の創始者となっている」とも記述し、全面的に東京式合巻なる名称を肯定しているふうでもない。また同章中に「活版摺の合巻としては『夜刃譚』初編が半年程先んでいる」とあり、この点においては石川氏と同様の認識を見せている。

筆者はかつて、活版による草紙類は上方の方が先行していることを指摘した⁽²⁾。また同じ時期に高島藍泉は大阪に滞在し、それらの作を実際に知り得る立場を得て、帰京後上方出版界の大立て者である宇田川文海より情報を入手していたであろうことについても指摘した⁽³⁾。しかし藍泉は上方の存在には一切言及せず、後掲の如くおのれこそが活版による草双紙の創始者であると宣言している。前田氏が「創始者ということになっている」と慎重に記したのは、『夜刃譚』の存在があったからではあるが、実際断定してしまうのは藍泉の思惑に填ってしまうことになるであろう。藍泉は功績を独占しようとしていたのであるか。本稿は、藍泉に先行する大阪における活版による草紙類を紹介し、藍泉の考案した活版による草双紙との相違を明らかにしつつ、藍泉の獨創性をどこに求めるべきかをも追求していく。なお、東京式合巻なるジャンル名称は、上方の存在を全く無視しており妥当性を欠くゆえ、本稿では以下一切用いない。また合巻なる名称も挿絵の重要性という点で著しい低下が認められるので、この名称もまた外しておく。合巻の後継的存在として認識するべく包括的名称の草双紙を用い、それに印刷技術名の活版を冠して活版草双紙と本稿で

は命名する。当時の生き証人とも言うべき三品蘭溪、野崎左文ともに草双紙なる名称のもと昭和初頭に回想している。「早稲田文学」昭和2年10月号「草双紙の研究」三品「極盛期と維新後」野崎「草双紙と明治初期の新聞小説」。そして活版のみならず銅版でもこの体裁に近いものもあり、これもまた含まれるものとして注記しつつ紹介する。また草双紙というより中本型読本や切附本に接近していると認められる体裁もあり、今回はこれを一応区別しつつも包括的に処理してある。

その代表格である『高橋阿伝夜刃譚』初編の体裁に関する検討は不可欠であるものの、この問題は別稿にてじっくりと論ずる必要があるので、今回は考察の対象から除外する。本田康雄氏の指摘する如く、『阿伝』初編は挿絵の丁と本文の丁が完全に分離している。これを草双紙の体裁とするには無理があるからである。しかし二編以降合巻の体裁を襲ったことから、初編と二編以降を異なるジャンル名称で提示するのは何かと不便である。これらも含めて別稿にて詳述してある。⁽⁵⁾

(二)

まず前述した藍泉自身の発言を検討する。興津氏も前掲書で引用しているが、確認の意味で以下引用する。

玩弄の赤本一変して敵討物の前編後編と巻を分かちしは南仙笑楚満人の発明にて、続き話の十冊ものの合巻二冊に分けたるは式亭三馬が（雷太郎強悪物語）に嚆矢り、近年までも合巻は丸飯名ばかりの筆工なりしを、活字に代用て傍訓をせしは小学生徒便利を計る拙き僕が考へにて、明治十二年の秋九月弥左エ門町の文永堂より（巷説児手拍）いふ上下二帙の読切物を出版したるが創めにて、意外の好評を得たりしより今日江湖の草双紙は活字

に限る物とはなりぬ。「芳譚雜誌」明治17年9月 引用に際し句読点を補い、ルビは必要と思われるものを残した。また極端な宛字もそのままにしてある。以下も同様）

ここからも判るように、藍泉自身は「草双紙は活字に限る物」としており、合巻なる名称は使用していない。ここで如上の発言が明治十七年九月になされたという点に注目してみたい。

柳田泉氏の『続隨筆明治文学』（昭和13年、春秋社）所収「高島藍泉伝」に拠れば、前年六月に大阪から帰京した藍泉は、「小説の寄稿を乞ふ新聞や書肆が漸く多くな」り、「社友乃至寄稿家として執筆」する姿は「時の文壇を風靡する概があつた」という。「近年屢々病に犯さるゝを憂ひ居を転ずるに如かずと人の勧めにより」「北豊島郡千束村（今の浅草千束町）に移」つたのが翌年九月であつた。しかし「移居後も毎日不快を押して小説を執筆してゐたが：心密かに万一再起せざるを慮り、養子瓶三郎宛の遺言状を作つて藏つて置いた（九月二十三日封ずとあり）」という状態であつた。従つて三代目種彦として絶頂期にあつたこと、しかしその一方で健康面の不安から老い先短いことを覚悟していたことが判る。興津氏は前掲書にて、当時の藍泉は典拠の活用が露骨であつたりすることより創作の行き詰まりを指摘するが、拙稿にて考証した如く、典拠の活用は本格的な創作活動開始時より見られるので、その点を強調することによつて創作に悩める姿を導くのは如何であろうか。やはり病魔によつて感じられる不安や代筆の必要から、複数の執筆注文を手取り早くこなすべく典拠の活用をより積極的に取り入れたと考えるべきであろう。

絶頂期に上り詰めながら早くも死という最悪なかたちで終焉が見え隠れする。そんな藍泉が、現行草双紙の創始者であると誇示してみせる。黄表紙から合巻へと移行する契機は、筋の上で一定の分量を要求される敵討というテーマの出現にあり、これは楚滿人に始まった。また合巻の第一作が『雷太郎』であると事実にして自称したのが三馬であつた。藍泉もここへ自分を並べようとしている。即ち文学史上に名を留めるべく証拠作りを行った。これは見事に

奏功し、今日まで『巷説兎手柏』が活版草双紙の嚆矢とされている。

ところで『兎手柏』自身には新発明を意識している如き記述が見出せるのであろうか。初編自序は作品内容の紹介に続けて、「芳譚雜誌」の連載であったことを述べた後、「二巻統の稗史にしてよと、発兌人の需に応じ」たとしている。これを信じれば、上下二巻という企画を立てたのは版元の文永堂ということになる。同書肆が松村春輔にもさせた『復古夢物語』、『春雨文庫』という二つの当たり作とも、各編上下二冊という体裁であった。『春雨文庫』に至っては、もはや春輔の手を離れてはいるものの、まだ刊行が継続中である。『兎手柏』が初・二編各上下二冊で刊行されたのも文永堂の企画と考えて間違いないであろう。『兎手柏』と同年刊の活版草双紙第二弾は『松の花娘庭訓』である。こちらは具足屋から上中下三冊、各七・九・九丁という体裁で刊行されており、冊数・丁数とも『鳥追阿松』を踏襲していたことが判る。従って単行本化される草双紙の体裁に関して、藍泉は書肆に任せていたと思われる。

『兎手柏』の丁数は初編上下、二編上までが各十丁、同編下のみ九丁であり、これは幕末の合巻の体裁を襲っている。近世期であれば、何らかの操作をして二編下も十丁に仕立てたであろう。しかし既に前年ヒットした『鳥追阿松海上新話』が一卷九丁という分量であり、もはや五丁一卷という草双紙の基本形は形骸化していた。『娘庭訓』もまた三冊という外形を優先し、丁数を九に整え切れなかった上巻は半端な丁数のまま放置された。丁数という形式の縛りが著しく希薄になっている。

さて再び『兎手柏』の自序に戻り、今度は二編を見てみよう。

片葉の芦の片言も、訂正で鉛字に組立たれば、評判も嘸あしといふ、文字に因は脱れざるべし（本文は後掲の如く早稲田大学図書館柳田泉文庫蔵本に拠る）

連載本文を殆ど推敲せずに「鉛字に組立」たので、好評が得られないかもしれないと謙遜してみせている。これは一

方において本音でもあり、草双紙と活字の折衷が東京で受け入れられるか否か、確信が持てないのである。前掲回想中に「意外の好評を得たり」とあったことがこれを裏付けている。ところで「鉛字に組立」ようと提案したのは藍泉その人か、はたまた書肆側か。自序の主語は藍泉であった。前掲回想中でも「活字に代用」したのは「拙き僕が考へ」とあった。文永堂、具足屋とも未だ活版の書籍には手を出していない。従つて本文活版を提案したのは藍泉としてよい。

前年七月大阪から帰京した藍泉は、宇田川文海に託した原稿が活版によつて速やかに『鉄道ばなし』なる一冊に變貌している事実に驚愕した。また後掲の如く、六月中に「大阪新聞」に連載していた「五月雨物語」が、八月には銅版の本文で刊行されていた。⁽⁷⁾ これらの存在を眺めつつ、これらを如何に改良すれば東京でヒットするか。藍泉は考えを巡らせていたことであろう。同じ頃には『夜嵐阿衣花廼仇夢』が好評の内に編を重ねていた。年が明けると「高橋阿伝」が競作された。東京において、やはり草双紙という容器が持つ底力を藍泉は実感していたに違いない。『夜刃譚』が初編のみで挫折した試みは、藍泉の場合連載における挿絵の転用と本文の組み改めで乗り越えられそうである。文永堂から幕末合巻スタイルで、具足屋からは『阿松』スタイルという二書肆各々の体裁で刊行された。藍泉はどちらの体裁が好評を博すか、また制作に有利か、各々観察する狡猾さも持ち合わせていたに違いない。

結局『兎手拍』のスタイルを踏襲したのち、十四年以降新機軸を打ち出すに至る。従つて出発点に当たるのは回想中の指摘通り『兎手拍』としてよい。この体裁を分析する前に、その先駆的存在に当たる上方の活版本の類をまず見ておかねばなるまい。

(三)

既に明治十年の西南戦争時刊行された『薩摩大戦記』は、中本で表紙から口絵までが木版で、本文は活版という体裁である。鈴木雷之介編輯で版元は大阪の前田喜兵衛。確認し得たのは五、六編のみで、表紙は木版で中央に書名、口絵が各々六、四丁で本文は各三丁半という構成である。従って草双紙というより切附本に近い構成といえようか。この構成は、後述の如く翌年石川和助から刊行される諸作に継承される。十年時に確認できた草双紙に近い体裁のもはこれだけである。既に報告した⁽⁸⁾ように、翌年以降上方における活版小説は、その数を俄に増す。今回は連載を経て活字版による単行本となった作を主なる対象とする。『兎手柏』もまた連載を経由していたし、挿絵の転用も重要な着想だったからである。

既に指摘した⁽⁹⁾如く、藍泉は明治十一年四月中旬より六月末まで下阪し、宇田川文海の好意により「大阪新聞」と「大坂日報」両紙に寄稿している。在阪も残り少なくなつた六月二十日から三十日まで「大阪」紙上にもものしたが、藍泉にとって初の連載となつた「五月雨物語」である。最終回に大阪前川源七より単行本化の予告があるが未見である。前川は前掲の藍泉大阪置き土産の原稿に基づく『鉄道ばなし』の版元である。管見に及んだ単行本『五月雨物語』は石川和助より刊行されたものである。しかしこちらは紙上では一切予告が見られず、無許可のまま前川を出し抜いてしまった可能性がある。「大阪」紙上に石和の広告が初登場するのが八月六日で、続いて八日雑報欄に以下の記事を見出すことができる。

今度平野町五丁目八番地の絵草紙屋石川和助さんが、絵本五月雨物語と西南阿曾の白浪と云ふを編せられ、五月

雨物語は本社へもよこされましたが、是れは東京の転々堂主人が本社に居た時に新聞に記せしお常源吉五月雨物語を、丸抜きにして絵を加へたもので五坐る

連載した新聞社へ献本したのは、義理立てというより宣伝してくれという意であろう。新聞社側は（文海と思うが）、してやられたという思いであつたらうか。「丸抜きにして絵を加たもの」という言い回しは微妙である。要するに連載の転用ということ、もともと我が社のものなのにと、我が社発なのでよろしくとも解釈できよう。

管見に入つた『五月雨物語』は国会図書館蔵の中本中下二冊で、上は未確認ながら存在していたことは確実である。三冊本にしたのは『阿松』を踏まえたからで、機械的な三分冊の結果、文の途中で次の巻へ移っている。丁数は一定していない。摺付表紙、見返しに続き読本風の解説を伴う口絵四丁、ここまでが木版で、本文銅版という体裁である。従つて前掲した前年刊の『薩摩大戦記』同様、切附本に近い。本文の表記は、連載時がルビ付き漢字と平仮名交じりであつたが、単行本では漢字はルビ付きで平仮名部分を片仮名に改めている。本文自体は前掲「丸抜き」とあつた如く、連載と連載の区切れ目に○印を伴うほどである。平仮名を片仮名に改めた理由は未詳。石和の銅版による草紙はいずれも同様の表記を採用しており、銅刻師の都合によるものであろうか。

連載十回中挿絵を伴うものが二回ある。第六回は親子再会の、最終回が兄妹対面の各々場面である。口絵でも下巻一丁ウラに親子再会時の、同巻四丁オモテに兄妹対面が描かれており、連載時の挿絵を踏まえて描かれていることは明らかである。本文は新聞の連載を銅板に刻めば事足りるので、やはり木版による摺付表紙と口絵に時間を多く割かねばならない。既に連載時の挿絵があれば、それを描き改めるだけで済む。しかし挿絵がないものを新たに描き始めるとなると、労力と資金といずれも必要になる。今回のように連載終了後であれば、添える口絵も筋を追いかければそれでよい。しかし連載の途中から、あるいはこれを中絶して単行本化するとすれば、挿絵の方に制作時間を掛けね

ばならないので、まず挿絵の指示を出し終える必要がある。その後、本文を執筆しつつ当初の予定を変更せざるを得なくなつたとき、挿絵と本文とで食い違ふ危険性が発生する。『夜刃譚』初編は將にそのケースであつた。連載時に毎回挿絵を伴わせること。この意味するところは頗る重要で、草双紙において毎丁挿絵が存在しているという大きな特質とも絡んでくるし、単行本化をより速く、正確に成し遂げるための必須条件であつた。後掲の如く藍泉は連載時より企みを持つていたと考へるべきである。

連載に拠るものではないが、同じ石和から同年に刊行された『十八ヶ条問答』にも注目しておこう。摺付表紙から口絵までが木版、本文銅版という体裁は同一であるが、本文が上段に配され下段が挿絵である。このような状態で、本文の半分以上の丁に挿絵がある。挿絵も本文と同一の銅板を用いており、活版の如く木版の挿絵を組み込む必要がない。銅版は一枚の原版に本文も挿絵も描き込める。そこには木版にも似たスペースにおける融通無碍なる利点がある。但し木版に比べ、細密さには限界があり、また重ねて摺る際にも回数の中で著しく劣つていた。同作は届けが十月十八日とあり、「大阪」紙上で広告されるのは翌月八日以降である。藍泉が『兎手柏』においても、活版による本文の上あるいは下段に挿絵を配しているが、これは藍泉の独創ではなく、刊行前年に既に上方で原形的形体が試みられていたのである。

既に報告したように、⁽¹⁰⁾東京と同様大阪も、当時の連載は二、三回が主流で、単行本化するにはボリュームの問題が立ちはだかつていた。「五月雨物語」に続いて単行本化された連載は、「大坂日報」の「広井盤之助復讐始末」である。八月二十二日から翌月一日まで八回に亘つてゐる。なお、「大坂日報」は大新聞であり、大新聞はつづきものを掲げないというのは誤伝である。広井盤之助の敵討ちは著名であつたようで、平出鏗二郎の『敵討』や梅原北明の『変態仇討史』においても紹介されている。連載と『敵討』の記述が接近している箇所も多く、平出が典拠として掲げた

「復讐録」や『日本義烈伝』もこの連載を踏まえた可能性が考えられる。しかし「敵討」「変態仇討史」とも、盤之助の「盤」が「磔」になっているのをはじめ、幾つかの違いは無論存在する。この点に関してはここでは述べない。

単行本化に際しての造本を検討する前に、連載としての分析も試みておく。第一回の冒頭では、開明の御代、敵討ちは禁止されているものの、忠孝からの仇討ちはやむを得ない行為であるとのカムフラージュを施して、更に以下の如く言い訳を続けている。

爰に土州藩士広井盤之助が父の縫棚橋三郎を打たる二十五年の昔物語を今回同国某より報道さるゝを得て左に其の概略を掲ぐ。蓋し世の頑儒者を興起し、併て時世の変遷を示し、且聊か史家に供せんことを欲してなり。看客乞ふ、記者が微意あるところを察せずして、徒に旧聞を以て新紙を填むるの皆をなすこと莫れ。

当時の新聞は、新聞紙という意ではなくニュースという意で用いられる。二十五年前の、しかも仇討ちに取材した記事では堂々と掲載するには憚りがある。そこで実録性と時の流れを強調するのである。但し、後述の如く物語性濃厚なるゆえ、これもポーズとして行っているに過ぎない。

ここで注目したいのが「今回同国某より報道さるゝを得て」とある点である。即ち投書の如き存在に基づくというのである。「五月兩物語」もまた連載の冒頭で藍泉自身明らかにしているように、投書家より新聞社にもたらされた原稿を、編集長の文海が藍泉にアレンジさせたものであった。文海は「私は大阪日報と大阪新聞をかけ持ちで筆を執つてゐた」（『喜寿記念』、大正14年、宇田川翁喜寿記念会 以下の文海の回想も同書による）と述べているように大両新聞の雑報欄における担い手であり、「広井盤之助」の連載もまた文海が介在しているはずである。本当に原稿が投書家から送られてきたか否かは保証の限りではないが、毎日充当を迫られる紙面にとって連載は有り難い記事であった。しかし当時は未だ連載に対する商品価値の意識が十分でない。八月二十五日の休載にあたり、「今日は原稿

が多くありますゆゑ、広井盤之助復讐始末はお預りにいたし、其代り明後は屹度御覽に入れます」という扱いを受けている。

連載の梗概を示そう。安政元年十月二日、土佐藩の徒歩広井大六は釣りの途中に、酩酊状態の同僚棚橋三郎のため溺死する。三郎は追放、広井家は断絶、大六の子息盤之助は三郎を追う。しかし無実の咎により拘束され、恩赦を経て再び敵討ちの旅に出る。辛酸を嘗めながらも、大坂で勝海舟の助力を得、紀州に潜伏する三郎を討ち果たす。時に元治元年六月二十日のことであつた。以上の如く盤之助を忠孝に篤い人物と設定し、父の死を夢のお告げによつて知つたり、敵探索の途中恋をも断念したりなど物語化も濃厚であり、勝海舟の登場や仇討ちの際に水戸藩士の加勢が描かれるなど幕末期の時代性を反映させ、記事ではあろうが読み物として提供していることは明らかである。

連載終了から一ヶ月後に単行本の届けがなされ、書名も『復和歌の浦浪』と合巻風に改められた。以下国会図書館蔵本の書誌を簡潔に示す。

書名 題籤題（左肩。書名に続き「^{マツ}篇」とあり）、内題ともに『復和歌の浦浪』

体裁 中本上下二巻一冊。上下各八丁で刊記が二丁加えられる。

構成 表紙、見返し、本文十六（上下各八）丁、刊記二丁、奥付（記載なし）

柱刻 活版で『復和歌の浦浪上（下）の巻 一（十六）』。刊記部分には柱記なし。

届 明治十一年十月十四日

編輯兼出版人 西松虎亮、見返し雲川筆（木版で「烈」「明治戊寅之秋」）、画工長栄

挿絵 木版で八葉（下段に挿絵、上段に本文。十五丁オモテ挿絵に画工署名あり）

印刷 見返しを除き、題籤から刊記まで活版

刊記 前述の届け年月日、編輯兼出版人氏名に続き、売捌所として泉万助、静雲堂、弘開社、太田権七の四書肆名、及び「各地方 絵草紙店、各停車場内、小間物店、此他各新聞売捌所并ニ配達人」とあり。

該本は原装か改装か未詳ではあるが、やはり原装は上下二巻一冊であろうか。題簽における空白部分「篇」より、当初二冊の予定から最終的には一冊へという変更を読みとることができよう。肝心の版元は未詳。売捌所のみが並べられている。この点に関しては後述する。連載終了後、その本文を活版で再び起こしたら、挿絵も新たに加えたとしても一月半で単行本化されることがここに明らかとなった。

届から十日程経た十月二十三日の「大坂日報」雑報欄に単行本化の予告が報じられた。

裏に弊社雑報中にて五評判に豫りし広井盤之助復讐始末を、此度西松虎亮君が畢生の筆を揮ひ文を艶に語を簡にし、処々に美麗の画を挿み西洋風の美本となし売出れしが、題字は雲川大人の揮毫にて殊の外大評判なりと。シテ本の名は復讐和歌の浦波ウラナミでござる。

同日「大阪」紙上雑報欄でも同様の内容で宣伝され、翌日の雑報でも書き落とした書名を補足していた。従つてこの辺りが刊行日に想定できる。

西松虎亮なる人物に関しては未詳。わざわざ記事中に氏名を掲げているので、新聞社員ではあるまい。「畢生の筆を揮ひ文を艶に語を簡にし」とはあるが、連載とはそれほどの違いは認められず、記事臭かつた表現を努めて改めているに過ぎない。しかし文海がわざわざ氏名を紹介するところをみれば、この連載を入手した文海周辺の探訪の一人であり、単行本化にあたつても校訂まで任せただであらうか。

記事中に造本に関する記述「処々に美麗の画を挿み西洋風の美本となし」が見られる。「大阪」の方でも「婦産ふんさんにも解りやすきやう所々に画を挿みたる洋本仕立の体裁」とあり、翌日の追加記事でも「洋製の一冊」としていた。大

新聞の連載であったので、挿絵は伴っていないなかった。単行本化に際して長栄の挿絵が八葉配される。半丁の下段に挿絵で上段が本文である。摺付表紙でもなく、序、口絵とも存在しない。題簽から本文まで活版で、見返しのみ雲川の書体を現すため木版である。これが「西洋風の美本」であり「洋本仕立」なのであった。装丁は袋綴であり、洋装をわざわざ作り改めたようには見えない。

前掲「大阪日報」雑報の単行本化紹介記事掲載二日後の二十五日、今度は広告欄で紹介される。

西松虎亮編輯 西洋仕立全一冊 復和歌の浦浪 定 九錢五厘

右は先日の大坂日報に掲載せし広井盤之助の復讐始末を平説やまぶかに編直し、処々に細密の画を挿み、婦女幼童にも解安くつて面白いことは此上なき書物でありますから、皆三買つて五覧下さい。(各住所は省略) 泉万助 弘開社

大坂新聞社 静雲堂 笑々社 太田権七 土橋平次 各地方絵草紙店 各ステーション内小間物店 此他各新聞
売捌所并ニ配達人

なお太田権七は京都、土橋平次は神戸の住所となっている。同月三十日の同紙広告欄には、広告本文の活字は右同で、その上段には単行本十四丁オモテにあるのと同様の挿絵を添えて、一層の宣伝を行っている。この挿絵は將に仇討ちを果たさんとする場面で、それを精巧に写しつつ、やや小さくしたものである。一方、刊行の広告が初めて掲載された翌日の二十六日、小新聞の「大阪」に次のような記事が掲載されている。

去る二十三日の夜より堺桜の町紀川席において、有名なる石川一口子が例の復讐和歌の浦浪を読みはじめましたが、案外の大当り

従つて、連載終了後講師に語らせて、更なる浸透を図っていたことが判る。藍泉の「五月雨」もまた、連載途中から既に講談でも語られていた。⁽¹¹⁾ 恐らくそこには文海の指示があるのではないか。特に「和歌の浦浪」は大新聞の連載

ゆえ、小新聞のみの読者へも浸透を図る必要があった。本文の書き換えと挿絵の添加は、小新聞の愛読者を意識した戦略である事言うまでもない。

ここまで、届が十四日、新本紹介記事が二十三日、広告が二十五日という流れを確認できた。雑報記事でまず購買意欲を喚起しておき、間もなく広告を出して店頭にも並べる。新聞の持つ宣伝効果を活用している。これは「かなよみ」新聞における『鳥追阿松』のケースとほぼ一致している。刊記に刊行日が記載される場合もあるが、これも届日同様当てにならない。例えば藍泉初の活版による単行本『鉄道ばなし』は届が七月一日、刊行同十三日と刊記に記されているが、新聞広告は十九日が初見である。

『和歌の浦浪』の版元は、前述の如く明示されていない。泉万助以下の書肆名は要するに、この単行本の取り扱いは店である。雑報の予告記事、広告覧の記載ともに版元名は示されていなかった。それは掲げる必要がないからであろう。即ち新聞社自身が版元なのである。雑報記事はともかく、広告は安くもない掲載料を払うにもかかわらず、版元名が一切示されていないのも、これを裏付けていよう。売捌所名もまたこれを補強している。太田権七と土橋平次は京都と神戸の大売捌所であり、新聞の刊記によくその氏名を見せている。静雲堂は雑賀豊太郎も寄稿していた(『大阪』十一年十二月十一日雑報)「磊々珍報」なる雑誌の版元で、笑々社はのちにこれを承けた新聞縦覧所である。いずれもしばしば広告欄にその名を掲げているので、文海かその周辺人物と親しかったものと思われる。泉万助は直接の関わりがまだ特定できないが、文海主導で前川源七郎から刊行した『鉄道ばなし』にも大取次所として、静雲堂・岡島真七とともに並んでいる。岡島もまた新聞の大売捌所である。さらに後掲するが如く、やはり「大坂日報」連載を単行本化した『池田慎太郎の話』でも、大売捌所として単独でその名を見せている。このように連載の単行本化などには必ず名を見せている。弘開社も『鉄道ばなし』において売弘所にその名を見出すことが出来る。以上の如く、

売捌所にあった名前はいずれも新聞社や文海と深い関係を持つものばかりである。そしてその中には新聞社自身も、そして新聞取次店及び配達人も含まれていた。新聞の流通経路そのままである。

今一つ手掛かりとなるのが、以下に掲げる新聞社自身の広告である。『和歌の浦浪』新刊が広告された翌日「すりものひきうけ」と題して掲載された。意味がある資料なので引用しておく。

弊社儀是まで諸活版摺物御注文申請来候所、何分新聞印刷の余力に出候事ゆゑ自然万事手廻りかね、或いは諸君愛顧の厚意に背くこと尠からず。因て這般更に機械及び職工を増加して一層印刷の道に注意し、凡そ書籍の翻刻摺製本の和洋仕立てに論なく、名刺の和洋を問はず、引札名刺帳簿券状の類より其他摺物銅版に属する一切の事、成丈け低価を以て御受負、お約束の日限を誤らざる様精々勉励可仕候間、四方の諸君御注文の大小に拘はらず依旧陸続御愛顧あらんことを伏冀す 明治十一年十月 就将社

就将社とは無論「大坂日報」社のことである。この広告は挿絵を添えて目立つように工夫され、広告欄の三分の一を占領するという扱いである。以降は挿絵こそ伴わないが、同一の本文のまま連日掲載され年末まで及んでいる。収入源の一つである広告欄を、数ヶ月間潰してまで掲載するほどの力の入れようであった。活字版の機械と職人を補強し、本業以外にも印刷の外注を受け付け、迅速にして低価格で提供する。広告のことゆゑ鵜呑みにはできないものの、当時の印刷機械と職人への需要は供給を上回っていたであろうから、それに対する出資の額も高む筈である。機械、職人いずれもフル稼働させて利潤を上げなければならぬ。当時就将社は、喧嘩別れしたライバル「大阪新報」と鎬を削っており、顧客を呼び込む工夫が様々な角度から求められていた。

この広告が『和歌の浦浪』刊行とほぼ同時になされたというのは偶然であつたらうか。機械と職人を新たに確保して本業ではどの程度の労力が要るか、副業にどれだけの時間が割けるか。これらを試験的に実践するべく『和歌の浦

浪』が上梓されたものと思われる。同時にその商品こそ副業の実力を雄弁に物語る筈である。西洋風な美本と自称した意味もここに求められる。ここに至るまでは、まず実験的に『鉄道ばなし』を前川源七郎から上梓させ、続いて『五月雨物語』を同書肆から刊行予定であったが、銅板によって石和に先を越されてしまうという苦い経験があった。このような横取りを阻止するべく自前の出版部門を置き、石和には真似できない活版によってより速く、より安く提供する手立てを獲得したのである。

以上の如く、『和歌の浦浪』は大新聞の連載から初めて単行本化された作である。のみならず、藍泉創始とされた上(下)段に木版による挿絵を、下(上)段に連載に基づく本文を配するという活版草双紙の一形態をも先取りしている。更に新聞(雑誌)社内に単行本部門を新設し、自社の連載をそこから刊行するという運営形態もまた藍泉が踏襲したことになる。そこで主導的役割を果たしていたのが宇田川文海であり、在阪以来藍泉が文海に学ぶ状態は継続していたと考えられる。

(四)

『和歌の浦浪』が上梓された一週間後、「大坂日報」は「池田慎太郎の話」の連載を開始した。十二月三日から二十七日まで十九回という、当時としては異色の長物語となっている。単行本化が長編化を促していることも判る。今回も敵討ちを軸にした波乱の人生物語である。中間奉公をする慎太郎は、家出した母を探しに旅立つべく暇をもらう。旅先で命を救ってくれた恩人が、後に殺害されたことを聞き仇を討つ。感情の澁れから自分に殺意を抱く者があり、先手を打ってこれを殺害し潔く縛に就く。前半を敵討ちにしたのは『和歌の浦浪』が好評であったということ裏付

けていよう。加えてボリュームを増すため、後半部分を緊張感のある筋にしながら展開している。前述の如く、本作も単行本化されている。未見ではあるが、十二年一月下旬頃には刊行されていたようである。同紙一月十九日付広告欄には以下の如くある。

大坂池田慎太郎の話 活版摺画入一冊 定価七錢八厘

右は大坂日報に評判の高ひ慎太郎の高五郎が実説を脱つゝめ画入りにして、至極面白く読易きふり仮名附の雜誌なれば、春雨のつれづれに御物語ともなし給はんことを希ふ。 売捌所 大坂備後町中橋 泉万助

また「大坂日報」の小新聞部門「大阪」でも、三日後の二十二日に同一の広告が掲載されている。今回も連載本文に依つて活字で組み、挿絵を加え、表現を些か手直しして小新聞中心の読者へも浸透を図ろうとしていることが判る。

ここまでは『和歌の浦浪』と一見同様の手順と戦略に思えるが、連載終了時から単行本化されるまでの日数を比較する必要がある。二ヶ月弱であったものが二十数日間と大幅に短縮されている。しかも『池田慎太郎』の方は、間に正月休みを挟んでおり、実質要した日数は今少し短縮されるであろう。これは単行本化を当初から予定しつつ、連載を重ねていかなければ不可能な数字である。時間の短縮は、何れが手間を要するかという前作の経験が生かされている。とすれば、これまた書肆名未詳ながら新聞社の手になると考えられる。

今一つ刊行を早めた理由があった。「大坂日報」新年第二号に当たる一月七日の広告欄に、ライバル社である「大阪新報」より連載経由の単行本が掲載された。未見であるが、『浪花の梅子の実録』と題された小本二冊であり、「西洋綴」とあることより活版であったと思われる。「出版書目月報」第十二号（明治十一年十二月）には、同作上篇が掲載されており、新年刊行は下篇のみであったか。広告には、挿絵を加え表記もルビ付きに改める旨記載され、『和歌の浦浪』を意識した処置が施されている。それは角書「浪花の浦なみ」に端的に示されている。ここからしても『和歌の

浦浪」は、今日予想される以上の成功を収めていたことが判る。これまた未見であるが、海賊版を得意とする例の石和が『近頃土佐の聞書』と改題して「岩井盤之助」を単行本化している。「大阪」広告では十一月八日が初出。前掲「十八ヶ條問答」と並んでいることより、同様の銅版であったか。同紙「和歌の浦浪」広告初出より四日程先行している。従って同一作が銅板と活版とで競作されていたことになる。また連載終了後の十二月になっても、「岩井盤之助」は講師師によって語られていた（「大阪」11年11月29日雑報にて1日以降の予告）。將にこの時「大坂日報」は次の企画である。「池田慎太郎」の連載を開始しており、既に単行本化を予定していた。ところが今度は石和ではなくライバルの新聞社もまた自らの連載を単行本化して上梓していた。「池田慎太郎」が短期間のうちに単行本化された背景には、大阪新報社への対抗意識を読み取るべきであろう。以上のように、大阪では連載の単行本化が、活字によって競って行われつつあった。これは「高橋阿伝」競作の一ヶ月前のことである。

ライバル社による同様の企画が出現した上に、刊行日を僅かに先行されてしまう。文海を中心とする「大坂日報」・「大阪新聞」グループは、次の一手を工夫する必要に迫られた。「池田慎太郎」によって大幅に短縮した製作期間を、更に詰める方法は何か。それは一つしか残っていなかった。挿絵である。連載に挿絵を伴わせてしまえば全てが解決する。しかし挿絵の活用は、大新聞では不可能である。幸いにも傘下には小新聞「大阪」がある。表記も当初から読み易さを旨として宛てることも問題がない。このような目論見のもとでなされた連載が「筑紫濁色の仇浪」である。

この作品は「大阪」紙上明治十二年一月二十八日に連載が開始され、大尾を迎えたのが三月二日であった。二十八回に及ぶ連載は、無論同紙としては最高である。これに次ぐのが前年における「梅霜の曙」の十八回であり、当時としては異例の長物語である。なお別稿にて「霜の曙」は、藍泉作「梅柳新話」の原拠であることを指摘している。⁽¹²⁾

「色の仇浪」は、他の記事と区別するべく独立欄が与えられ（第五回のみ雑報欄）、連載にいち早く注目していた文海を中心とする同社の象徴的な存在ともいえるであろう。

「色の仇浪」の挿絵は第五回と二十八回に配されている。僅か二回ではあるが、当時の同紙は記事全体を見渡してみても、挿絵を伴う方が極めて少ない。「色の仇浪」連載期間中、同紙の全記事で挿絵を伴ったのは五回に過ぎず、そのうちの二回なのである。また「色の仇浪」に先んじて連載された「貞操常磐の松」（11年11月24日～12月1日）は、十四回の連載中挿絵は全く添えられていないのである。周知の如く、当時は挿絵を木版で行っており、先行して注文しておく必要がある。挿絵で注意を喚起することが可能ではあるものの、掲載時点では記事としてやや旧聞となってしまう。また木版の挿絵を活版の本文に挿入するのも、金と手間が要る。連載に必ず挿絵を伴うところまでは流石の「大阪」も辿り着いていない。藍泉が毎回挿絵を伴わせた連載は、毎日刊行の新聞ではなくて、定期刊行の雑誌であった。

連載「色の仇浪」第一回冒頭に、以下の作品紹介がなされている。

記者曰す、左の一篇は広演社の末広要君が丹誠して寄送されたるを、弊社の食客山陰案山子が廻らぬ筆で写取し者なれば、四方看客其お積でお読み下さい。

「五月雨物語」をはじめとして「大阪」紙上でなされる長物語は、寄稿あるいは探訪が入手した原稿を利用しており、今回もまたその例に漏れない。広演社は新聞普及のための団体で、文海の回想に拠れば記事を朗読したり、自作を讀み聞かせる者もあったという。末広は「浪花新聞」以来の文海側近で、「大阪」紙上にも度々その名を投稿欄に見せている。文海回想に拠れば本名扇谷五兵衛で、船道具屋を営ぎ、後に政界に転じた。一方、連載としてアレンジした山陰案山子は、当時「大阪」紙上に世相諷刺の「恠冥百物語」を連載、好評を得ていた。やがて投書家から著作へと

携わってゆく。高木健夫氏の『新聞小説史 明治篇』（昭和49年、国書刊行会）に拠れば、小室信介は『朝日』が苦闘をしていた明治十三年には案山子の筆名で小説「夢の名残」を連載していたとある。信介は明治十二年に「大坂日報」と関係している（『日本近代文学大事典』）ともあり、小新聞の「大阪」が食客と紹介してもおかしくはない。

「大坂日報」連載の前掲二作が敵討ち、あるいはそれを軸にしたものであったのに対して、本作は全く異なる趣向を持つ。幕末から維新期にかけて数奇な運命を辿った親子の、離散と再会であった。これは「大阪」紙上における本格的な長物語の嚆矢「五月雨物語」と同種の趣向である。大小二紙の雑報欄をこなしていた文海は、大新聞は敵討ちものを、小新聞は激動期の人間模様を各々趣向に据えるという住み分けを意図していたのであろうか。

本作の梗概を以下紹介してみよう。肥後国の川島新三郎は、草相撲を好み四股名を筑紫渦とする。放浪癖が高じて妻子を捨て、出奔した千賀も廓に売る。一度は戻るが、兄の金を奪って再度飛び出す。途中で由縁ゆかりという遊女と馴染み、やがて夫婦となる。慶応三年、由縁は儂く死亡し、遺品から千賀の妹と判明し、千賀もまた婦らぬ人となっていた。千賀の墓参へ向かう途中、罪業に苦しめられ出家する。明治四年、故郷の妻子も三十三箇所巡りに出立する。漸く十一年一家再会する。以上の如く犯罪性という点を変更すれば、つづきものの祖とされる「岩田八十八の話」と類似した筋を持つことになる。幕末に男が罪を犯して故郷を去るものの、改心を経て維新後に結末を迎えるという型である。

連載「色の仇浪」の特徴として、二点指摘しておきたい。一つが怪談めかした描写である。二月二十五日連載第二十三回冒頭に、以下の断り書きが見られる。

記者伏て曰す。以下兩三回は案山子お株の怪談に涉り、開明の先導たる記者の任に背くところあるが如くなれども、勸懲風化の本意に背かざる事は其結局に至て明かなるを知るべし。是段一寸お断り申上おく。

つづきものに幽霊を登場させ、悪人を責め苛むという場面は、興津氏前掲書でも指摘する「横浜小僧殺し」（明治9年3月10、12日「仮名読新聞」）に既に見られる。記者と思しき仮名垣魯文は神経病のなせるわざとしていた。しかし案山子は、そのような直接の隠れ蓑は用意していない。

千賀の墓参へと向かい、道に迷った新三郎は、ある老人に一夜の宿を求める。老人は覗いてはいけない一室を指定して姿を消す。孤独と徒然に負けて覗いた新三郎が目にしたのは、美しい女の寝姿である。隠し女とは老人も好き者と近づく。起こそうとしても無反応なので、照れるなど肩に触れると女は振り返る。その顔は死んだはずの千賀で、耳まで裂けた口を向け睨み付ける。驚きのあまり卒倒する。しかしそれは夢であり、色欲の空しきこと悟り出家する。案山子は前述の如く「怪冥百物語」を連載中でもあり、怪異描写はお手の物である。しかし今回は幽霊自体に描写の中心が置かれているのではない。謎の女を発見し、刻々遅くなる男の想像力に力点が注がれているようである。記事という制約は前掲のお断りでもはや済んでおり、物語化への傾斜が極めて濃厚な部分である。

今一つの特徴は詠歌調の文脈である。三月一日連載第二十七回本文末に、以下の断り書きがある。

記者伏て曰す。此一回最も記者の心を用ふる処ありと雖も、一度巡礼をせし人が観世音の詠歌を譜じ知る者にあらざれば、記者苦心の十分一も知ること能ふまじ。噫

ここは置き去りにされた妻子が、三十三箇所巡りを始める場面にあたる。七五調に寺の名前を折り込みながら道行き文が展開されている。一節を示せば「心の月もさへ渡る、石山寺の誓いかや。堅き岩間の苔清水」の如く、各寺院名全てに左点の如く○印を施している。三十三箇所全て詰んでいる読者ばかりではないであろうから、親切心から出た配慮ではあろう。それ以上に注目すべきは、「記者の苦心」がどこにあつたかである。恐らく当初送られてきた原稿には、単に巡礼するという筋しか存在しなかつたのであろう。それを全ての寺院名を折り込んだ詠歌に改良するの

である。その手間暇は相当なものであった。そのような楽屋落的な内容を、勿体ぶって信心深い顔をして告白している。

以上の如き断り書きは連載の段階では伴っていたが、単行本化されると削除される。記事という縛りがなくなるからである。しかし本文を書き改める必要は全くない。いち早い単行本化の一つの秘訣は、物語化が濃厚な本文を描く際は断り書きを添えておくのである。単行本自序は「いやよいはじめのころ」なる年記を持ち、完結とほぼ同時に単行本化の作業が進められていたことが判る。

単行本の刊記には後掲の如く三月二十二日出版とあるが、「大阪」雑報欄に新本紹介されるのが十六日で、広告欄に掲載され始めるのが二十九日からである。刊記に置く予定日より一週間程遅れたのであろうか。単行本の表紙・刊記とも八木信夫編輯とあるが、八木は当時の「大阪」仮編輯長であり、氏名を置いただけであろう。作者（翻案者というべかもしれない）である案山子は、序文にその名を留めているだけである。内題下にはいずれの篇とも「八木信夫著」とある。連載時の作者はあくまで連載時のみであり、これを単行本化したら、その送り主の所有物と変貌する事態が見て取れる。但し、今回はもともと原拠となる原稿が存在し、案山子はそれをアレンジしただけであった。また、後述する如く単行本が新聞社からの刊行物だとすれば、案山子の名を表に出す必要は必ずしもない。

以下早稲田大学図書館柳田泉文庫蔵本によつて単行本の書誌を紹介する。

書名 『筑紫濁色の仇浪』（上、中下篇表紙による。内題は上、中篇が『つく紫濁色之仇浪』、下篇は表紙と同一）

体裁 中本上・中下篇二冊（中下篇は合一冊）、装丁は二箇所りボンによる仮綴

構成 表紙、見返し（記載なし）、序二丁、本文十四丁半、刊記半丁（上篇）

表紙、見返し（記載なし）、本文十二丁（中篇）、本文八丁、刊記半丁（下篇）

柱刻 「筑紫濁色の仇浪上（中、下）之卷（序） 一（一〇十五）、（二〇十一）、一（九）」

届等 「明治十二年三月七日御届 同二十二日出版」（上篇刊記）

「明治十二年五月二十四日御届 同六月出版」（下篇刊記）

編輯兼出版人 八木信夫（上・中下篇表紙、及び刊記）

序 山陰案山子、画工長栄（上・中下篇表紙）

挿絵 木版で九葉（半丁の上あるいは下段に配され、残りは本文）

印刷 本文活版、表紙、挿絵は木版

刊記 上下篇とも、前掲届と刊行月日編輯人氏名に続き、売捌所として吉岡平助・岡島真七・泉万助・静雲堂、太田

権七の五書肆名が住所と共に列記され、続いて「各地方絵草紙店 各停車場内小間物店 其他各新聞売捌并ニ

配達人」とある。上篇のみ「ひろめ 西松虎亮著 和歌の浦浪 上下篇」という広告が添えられている。版元

に関する記載なし。

単行本における注目すべき点をいくつか指摘しておく。まず表紙である。既に紹介し広告にもあった『和歌の浦浪』は、無紋表紙で左肩に題箋という伝統的なスタイルであった。対して本作は、二体のエンジェルが上下対角線上に描かれ、書名が記される布を持つという意匠で、その右に編輯人氏名と画工名、左には「明治十二年三月刊」と記されている。この絵柄は例の新聞錦絵「東京日々新聞」の題字部分でお馴染みのものであり、大阪の錦絵新聞もこれを踏襲するものが多く、「大阪新聞錦絵」「大阪錦絵新聞」等確認しただけでも八種を数える。錦絵新聞を想起させる表紙を用いて、購買意欲を高めようとしたのであろうか。洋紙に摺られているが、木版による墨一色摺と思われる。これは入木によって篇と刊行月の変更を容易で安価に済ませる工夫でもある。

続いて挿絵に関して確認しておく。挿絵が伴っていたのは連載中の二回であった。その二枚は単行本の挿絵にも使用されている。大きさは単行本の方が些か大きく、彫り改めたものと思われる。連載時のままでは、単行本の方に余白が生じてしまうからである。しかし精密に拡大模写されており、流用という言い方が相応しい。連載時の挿絵をほぼそのまま単行本へ流用した恐らく初のケースと思われる。

『巷説兇手栞』は連載の挿絵を流用したとされているが、実は全てがそうではない。前田氏前掲本が指摘するように、連載の挿絵を裁断して流用するものは多いのだが、その結果必要な部分まで削除せざるを得ない場合も生じてしまう。そのような場合は描き改めている。本田康雄氏も前掲論文にて事実指摘のみしているように、連載第十九号〔芳譚雑誌〕63、明治12年5月16日〕の瘦法師と車夫の喧嘩を巡查が制止する挿絵がそれである。対する単行本二編下五丁オモテの挿絵は、既に喧嘩が終了し巡查の前に両者が跪いている場面に変えられている。これは連載時の挿絵を裁断するにあたり、右上の人力車が邪魔になるので断念したのである。本田氏はこれ以外の描き改めは存在しないとするが、結論は今少し慎重に導くべきかと思われる。例えば、連載第二十号の上〔芳譚雑誌〕64、明治12年5月21日〕と単行本二編下七丁オモテの挿絵は、確かによく似ている。しかし自決する彰義隊員の手前にある槍の位置が、少しくずれているように思われる。これも裁断するにあたり槍が障害となったので、槍だけずらして覆刻したのではあるまいか。全ての挿絵を対比してみたわけではないので結論は保留だが、この段階では裁断することを前提にして連載の挿絵を描いているはずはないので、どうしても単行本化に際して不具合が生じていたと思われる。従って「色の仇浪」が挿絵を流用しつつも描き改めたのと結果として変わっていないのである。

次に「色の仇浪」の単行本化までの期間をみておこう。上篇は連載十二回、中編が二十一回、下篇が二十八回大尾まで収められている。従って連載終了後一ヶ月を切る期間内で、連載全体の半分弱が刊行されたことになる。この期

間は前掲『池田慎太郎』とほぼ同じではあるが、『池田』の場合競争という特殊な事情があったことは既に述べた。一ヶ月であれば、読者にとつても余韻がまだ冷めやらぬ期間であろう。一方、『巷説兇手柏』初編は単行本刊行まで三ヶ月を要している。これは刊行した母胎の差によるものであろう。藍泉が本文、挿絵ともに流用しつつ、雑誌と同母胎から実質的に単行本を送り出すのはこれから三年後の『岡山紀聞筆の命毛』からである。⁽¹³⁾ 同作は十五年三月に完結し、五月に刊行されている。

ここまで『色仇浪』の版元は未詳としながら、新聞社によるという仮定で多くのことを述べてきてしまった。改めて版元について考えておこう。前章で紹介した『和歌の浦浪』と本作とは、以下の点で極めて接近した関係にあった。○版元名が明記されない ○刊記に並べられた売捌店が重複する ○『和歌の浦浪』が広告されている

『色の仇浪』は著者・出版人として「大阪」の仮編輯長八木信夫がその名を掲げていた。また売捌の吉岡平助、岡島真七ともに同紙の大売捌でもある。そして連載終了から間を開けずに単行本化に及ぶ。以上の状況証拠から、やはり新聞社から刊行された可能性は極めて高い。

さて、当時『色の仇浪』をどのような形態の書籍として認識していたのかを広告に拠って確認しておく。「大阪」三月十六日雑報には新刊紹介記事がある。

兼て弊社の新聞にて長々五機嫌伺ひましたる筑紫濁色の仇浪は、諸方より五註文に従ひ画入艸紙の小冊に仕りまして近日発兌致し升

これに続いて、文章も連載時より工夫された幼童婦女子向けの作であることが例によって並べられている。一方、同月二十九日の新刊広告は書名、定価「五錢五厘」があり、以降は次の如くである。

此書は大坂新聞にて大評判に預かりたる、色と欲の迷ひより悲しき事面白き事あまた集りたる物語を、此度一層

面白く書改め美しき草紙となおし：

以下は子供の土産によし、最寄りの売捌所で求購を願うという案内である。いずれの記事も「草紙」という名称が一致している。幼童婦女子を対象とする草紙とは草双紙が真つ先に該当する。しかし合巻というジャンルとは余りに隔たがりがありすぎる。対象と唱い上げた読者層のみが、表面的に一致するだけである。また『和歌の浦浪』広告に見られた「西洋仕立」などという呼称は見られない。そこには活版の普及もあるのであろう。普及と共に草紙などの用語から既成の形態に接近させようとする方向性も認めて然るべきであらう。

(五)

『巷説兎手柏』初編は九月一日の届で、三月七日届の『色の仇浪』初篇より半年後になされている。連載自体の始まりで比較すると、前者は二月十一日、後者は一月二十八日で、半月の差がある。従つて藍泉は『色の仇浪』の単行本を手にしつつ「兎手柏」の連載を開始することは出来ない。連載時に毎回挿絵を伴わせたのは、藍泉の指示か雑誌社側の判断か決定できない。しかし藍泉が「芳譚雑誌」に連載を送ると同時に、「毎号画を加へ」（同誌20号予告）るようにしたので、藍泉の指示があつた可能性の方が高い。毎回挿絵を伴つた結果、単行本化する際新たに下絵から描き始める必要がなくなった。これは結果なのか、それとも連載時よりの戦略であつたのか。ここまで述べてきた上方の、文海を中心とする実験的営みからして、連載時から既に藍泉は意識していたであらう。前述の如く藍泉と文海は刎頸の友であつた。とすれば、単行本化を睨んで、毎回挿絵を伴わせた連載が初めて登場したことになり、これは上方の半年間の試行錯誤を経ての結果なのである。

次に「児手柏」の書誌を確認しつつ、ここまで紹介してきた上方版との違いを明らかにしたい。以下、早稲田大学図書館柳田泉文庫蔵本の初編に拠って紹介する。二編はこれに準ずるので、ここでは述べない。まず木版による彩色摺の袋を伴う。主人公静馬の旅道具が描かれ、書名、書肆名、作者名、画工名と共に、扇子の中に「初篇」と記される。画工名は芳幾だが、「大蘇芳年補助」と並べてあり、下巻摺付表紙にも芳年の名が見えるので、表紙と口絵は芳年の手になるものか。中本上下巻二冊。摺付表紙を備え、上下二枚続きの意匠を持つ。鏡に映った婦人像が描かれ、背景は雲母刷。上下巻ともに各十丁という分量と併せて考えると、幕末合巻の体裁をそのまま襲っている。見返しの挿絵にも彩色が施され、書名、作者名、上下巻の別が記されている。書肆名は下巻にのみ見られる。上巻は自序半丁が続き、藍泉の筆を写している。次に口絵が一丁半配され、主要な登場人物を並べて物語の筋を暗示している。ここまでが木版で、以下活版による本文が八丁続く。柱刻は丁付のみで、本文の部分にのみ施される。奥付は木版による大島屋武田伝右衛門の目録で、「春雨文庫」「復古夢物語」「参考鹿兒島新誌」三作を掲げる。下巻は活版による本文十丁で、刊記は十丁ウラにあり、届年月日・出版人・著述人が並べられる。奥目録は、やはり木版で、「浪華史略」「小学用文填字法」「漫画早引」「烈婦銘々伝」「上野戦争記」「近世桜田記聞」の六作を掲げる。挿絵は上下巻併せて十葉で、上(下)段に配し本文は下(上)段に置かれる。

以上によって明らかのように、先行する大阪版の草紙に対して、藍泉の新工夫は袋と摺付表紙、序、口絵までを、従来の合巻と同様の木版に仕立てたことになる。二編上下巻各十丁という体裁は、前述の如く文永堂の提案であろう。東京は上方よりも合巻に対する愛着が深く、なおかつ「阿松」の大ヒットそして「阿伝」の競作とその商品価値は頗る高まっていた。藍泉の工夫はこれらの趨勢を睨みつつ、合巻と大阪発の草紙をいかに無理なく折衷させるかであった。その結果生み出された新製品に対して興津氏は前掲書にて、教養ある新しい読者層に向けてなされた

分析する。しかし「明治の新教育を受けた読者層」を主に対象とするなら、合巻の体裁を襲う必要はなかったのではあるまいか。同氏の読者層分類は、柳亭派對仮名垣派の対峙という図式から導かれたものであろう。これは各々の固定ファンが形成された以降の、結果としての構図である。そこに至るまでは、多様な読者を開拓するという営みが当然なされていたはずである。

木版による合巻の読者と活版による草紙の読者は、各々別個な読者層として区別することは可能なのであろうか。合巻は基本的に平仮名表記を用いる。漢字を使用してもルビを施す。しかも平仮名、漢字共に崩した字体を用いる。従ってルビなしの漢字や楷書は読むことができない者も多く存在していたであろう。「鳥追阿松」を始めとする明治期の木版による合巻は、漢字を多く使用しルビを伴わせる。これならルビを頼りに読むことができる。それでは活字による本文はどうであろうか。合巻しか読まない者にとって活字のみの本文は、かなり抵抗があつたであろう。しかし漢籍を嚙っていた程度の者なら、楷書は全く駄目ということはない。また例えば易関係の書籍も楷書で記載されているものもある。これらの書籍を読んでいた読者は、合巻の読者と区別できるであろうか。女性が合巻の一読者として想定される。無論平仮名しか読むことができない者もあつた。一方で占いの本を愛読する女性読者も当然存在し、楷書がある程度読解できなければ読者とはなり得ない。このような読者は、活字という媒体に対しても尻込みをしなかつたのではあるまいか。

一方、岡本起泉の『花岡奇縁譚』（明治15年）の一節に「奥へ来て新聞を読んで聞しておくれ。昨日の続きが出てゐるから」と、急立てるを三之助は押とめ、「読んでお聞せ申しもませうが……」とある。興津氏は「新聞雑誌発生の事情」（昭和58年、角川選書）において、これを音読の習慣の延長と考察する。それは否定しないが、聞きたがつている人物は活字が読めなかつた可能性も十分考えられる。とすれば、自分は活版の字体を読めなくても、活版の冊子

を購入して読んでもらう読者も存在していたのではないか。

以上の推測が認められるなら、藍泉の活版草双紙は連載の読者そのまま単行本へ引っぱり、なおかつ合巻の読者も強奪してくる目論見があったと思われる。連載の愛読者は問題ない。連載を読んではいなかった、合巻の愛読者をどうやって惹き付けるか。前述の如く当時は『鳥追阿松』の大ヒット、続く『夜嵐阿衣』そして『高橋阿伝』の競作により合巻は大きく息を吹き返しつつあった。そこに活版という異質な媒体を中心に据えて殴り込みをかける際、留意すべき点は何であったか。それは店頭に並んだ際に、他の合巻類と同様な顔を持たせることが先ずあった。摺付表紙を捲れば自序があり、そこには作者の自筆が留められている。続いて彩色の口絵が続き、主要登場人物達の運命が暗示されている。合巻の合巻らしい部分、即ち最も贅沢な部分を継承する。

これを前掲『色の仇浪』と比較する。表紙は木版だが、墨一色のエンジェルを配すという洋風なもの。序から活版で、口絵も存在しない。従って『兎手柏』は逆行、あるいは伝統との折衷ということになる。その折衷も、単に印刷における新技術を用いたものに合巻の顔となる部分を重ねただけと考えられなくもない。

ここで今まで紹介してきた大阪版の幾つかを並べてみる。

- ① 『鉄道ばなし』—表紙、序、本文とも活版。摺付表紙、口絵、挿絵なし。
 - ② 『五月雨物語』—摺付表紙と口絵を持つが本文銅版。挿絵なし。
 - ③ 『復和歌の浦浪』—題箋、本文活版。摺付表紙、口絵なし。見返し、挿絵木版。二段に挿絵と本文。
 - ④ 『筑紫濁色の仇浪』—序、本文活版。表紙、挿絵木版。二段に挿絵と本文。連載時の挿絵を流用。
- こうして見ると②と④をミックスすると活版草双紙に接近することが判る。更に③の見返しは雲川筆の題字が彫られていた。序に自筆の香りを残すには木版しかない。従って自序が木版というのもここから導き得るのである。藍泉

は帰京後、ここ一年間で刊行された大阪版の試作品を眺めながら、それらを換骨奪胎し新製品として提供した。単に東京は江戸の名残が色濃く残っているという考察は一面的に過ぎよう。藍泉は大阪発の作のみならず書籍の体裁も、自己流に改良したのであった。藍泉は『五月雨』の版元石和を「奸商」と呼び、「余が著述を盗み己が編輯と偽り官に乞て出版」と詰っている（『芳譚雜誌』明治12年10月21日、「山田落水」第十二編⁽¹⁴⁾）。しかしやられるだけではなく、それを逆手に取り、新機軸を打ち出していたのである。活版の選択は、石和の銅版に対する対抗策の意味もあつた。

忘れてならないもう一つのこと、雑誌ゆえに挿絵が毎回伴うという幸運もあつたものの、連載中から単行本化を目指していたことである。これもまた大阪発の諸作を知っていれば、逢着するのはそれほど困難なことではなかつた。毎回の連載に挿絵が伴うのは、実は毎丁挿絵を伴う草双紙の特徴ともかろうじて呼応しているのである。両者ではかなり違うのではないかと思ふかもしれない。しかし明治期の合巻は挿絵が大雑把になり、本文とのズレも懸念されない。挿絵は本文の語らぬ様々な情報を伝える役目をもはや担っていない。筋をしかも粗筋を、あるいは雰囲気さえ伝えさえすればよかつた。このような状況下では、連載一回におけるクライマックスを挿絵にしたものと、筋を示すだけの各丁の挿絵と、役目としては異なることがない。東京における合巻の変質と大阪版の実験的な草紙とが重なり合う地点に、藍泉による活版草双紙が誕生することとなつたのである。

従来の東京式合巻なる名称は、藍泉を始発とする所に大きな誤認があつた。これまで述べてきた大阪版の存在は、もはや無視することは不可能である。これらの発生期における実験的な草紙も含めて、従来の東京式合巻に替わる名称として活版草双紙を提唱したいと思ふ。

〔注〕

- (1) 「明治の合巻―所謂明治式合巻と東京式合巻なる名称を巡って―」(『文学論叢』12、平成7・3)
- (2) 「明治の草双紙―京阪活版小説を中心に―」(『近世文学』66、平成9・7)
- (3) 「藍泉と大阪―作家への道―」(『文学論叢』19、平成14・3)
- (4) 「版木から活字へ―稿本の終焉―」(『国語と国文学』昭和63年12月号)
- (5) 「高橋阿伝夜刃譚」初編に於ける諸問題―書誌とジャンルを中心に―」(『国文学研究』148、平成18・3)
- (6) 「高島藍泉の作風形成―「梅柳新話」を巡って」(『国文学研究』136、平成14・3)、及び注(3)の拙稿。
- (7) 「鉄道ばなし」は注(2)の、「五月雨物語」は注(3)の拙稿にて言及してある。
- (8) 注(2)に同じ。
- (9) 注(3)に同じ。
- (10) 「つづきもの論序説―「大阪」新聞、「大坂日報」を中心に―」(『言語文化と地域』、平成13・3、徳島文理大学)
- (11) 注(3)の拙稿にて指摘してある。
- (12) 注(6)に同じ。
- (13) 愛善社から刊行の連載に拠る単行本は「梅柳春雨譚」の方が先行しているが、これは実験的要素が多く、連載終了からも時間差がある。この点に関しては注(6)の拙稿にて言及してある。
- (14) 青田寿美氏が「貞烈美談小夜時雨」(リプリント日本近代文学6、国文学研究資料館、平成17・9)の解説にて、本文を引用しつつこの作品における石川和助の盗用事実を指摘している。

※新聞類は明治新聞雑誌文庫蔵に拠った。各所蔵機関に感謝申し上げます。